

サーサーン・ペルシア銀貨と

その東伝について

岡 崎 敬

I サーサーン・ペルシアの貨幣とその鑄造

イラン高原の西南部 Pārs よりおこった Artakhshēr I 世 (226—241 年) はパルティアの衰えに乗じてサーサーン王朝¹⁾を建設し (第1図1), その子 Shāhpuhr I 世 (241—271 年) の時には, 北はオクソス河のほとりから, 東はアフガニスタン, 西はメソポタミアにいたる広大な地域をその版図に収めたのである。その後いく度かの盛衰はあったが, Khusrav I (531—579) の時代には西は地中海よりアラビアを攻め, 北方に

も進出した。Khusrav II (590—628) も一時, 外にその力を發揮してコンスタンチノポリスにせまったが, その後衰退の一路をたどり, Yazdagerd III (632—651) の時, Nehāvand でアラビアの軍隊に破れ, Merv に敗死して, サーサーン王朝は瓦解した。

イラン高原ではハカーマニシュ朝より金銀貨が行われたが, パルティアもこれを襲用した。パルティアは片面に王の肖像を浮彫りにし, ギリシア文字を使用し



第1図 サーサーン・ペルシア銀貨 (イラン・テヘラン購入。天理参考館蔵)

1. Artakhshēr I (226—241), 2. Khusrav II (590—628),

た。サーサーン朝²⁾でも金貨・銀貨・銅貨を鑄造しているが、ギリシア文字は用いず、王の肖像のまわりにパフラヴィー文字で王名を記し、裏面には拝火教のシンボルである拝火壇をえがくのを常とした。Vahrām v (420-439) 以来、貨幣の上に製作した都市名の略号をつけることになり、これはサーサーン朝を通じて行われた。略号の比定はいまだ完全であるとはいえないが、イラン高原上の各地の名称があらわされており、Herāt, Balkh, Merv など、現在の Afghanistan やソ連領の地名と解釈されるものがある。例えば ST=Stakhr, KR=Kermān, HR=Herāt, MR=Merv (Marv) などである。

アラビア統治時代³⁾には Transoxiana, Ferghana, Fārs, Kermān, 就中 Khurāsān の銀山が用いられた。Afghanistan の銀山は九・十世紀に木材(燃料)の不足のため廃棄されたが、マルコ・ポーロ⁴⁾は Badakshān に良好な銀山のあったことを記している。

サーサーン朝においても、銀貨の鑄造はことに多く、土地の租税としても銀貨が用いられ、ことに多く鑄造されたのは Khusrav I, Hōrmazd IV, Khusrav II の時代であった。これらの銀貨はサーサーン帝国の勢力圏内で使用されたことはいうまでもないが、その版図をはるかにこえて、西は地中海より、Arabia の中央部、北は Caucasus 山脈の外にも及び、東は、本稿でのべるように、Pāmīr をこえて、はるか中国にも流出したのであって、ビザンツの金貨とならんで、東西貿易の基本貨幣となっていた。

ところで、中国において、西域の銀銭が注意されたのは、すでに漢代にさかのぼる。『漢書』西域伝によると、罽賓国では「金銀をもって銭となす。文を騎馬となし、幕を人面とす。」とみえる。白鳥庫吉博士⁵⁾は、「以金銀為銭」とあるのは漢人の筆勢から生じて来た誤で、実は銀貨幣のみ」となし、「Saka 王の貨幣」にあてている。

また『同書』西域伝、安息 (Parthia) の条に

「亦以銀為銭，文獨為王面，幕為夫人面，王死輒鑄銭」

とみえる。白鳥博士⁶⁾は Parthia の王 Phraates (Fradāt) v (2 B.C.-4 A.D.) が母 Mūsā と結婚し、王の鑄造した貨幣の一面に母後の肖像を配したもののあるところから、この銀銭を Phraates v にあてている。

サーサーン・ペルシアの銀貨は『北魏書』西域伝波斯国の条に現われる。この国の都は宿利城で、「賦税には、地に準じて銀銭を輸す」といっている。宿利城は Seleukus であろう。玄奘は『大唐西域記』巻11・波刺斯国の条にその都城を蘇刺薩儻那と記し、「貨には大銀銭を用う」、『戸課賦税人四銀銭』とのべている。サーサーン・ペルシアで

は、Khusrav I の頃から銀貨がうすくひろがり、Khusrav II (590-628) の時はもっとも大きく(第1図2)、玄奘が注意したのも、これに外ならない。

筆者は、以下の所論において、かかるサーサーン・ペルシアの貨幣、ことにその銀貨が中国に流出した様相を近年の考古学的調査の成果にもとづいて明らかにするとともに、かかる貨幣と玄奘の旅程との関係にも論及したい。記述の順序からすれば、中国とペルシアとの中間に位する西域の諸地域にペルシア貨がいかに浸透していたかを述べねばならぬ(折込みの地図参照)。しかしそれは多大な紙数を要するので今は割愛し、これを次号に期することにした。

II サーサーン・ペルシアの貨幣と中国

さて中国に於ける西域の貨幣については、まず新疆ウイグル自治区に Parthia 王朝や Kushān 王朝⁷⁾ のものを見ることが出来る。Khotan 近郊には Sino-Kharoṣṭhi 銭⁸⁾ といわれる西域の貨幣と中国の貨幣双方の形式をそなえたものがある。

Sāsān-Persia の貨幣は、いまのところ新疆、青海、陝西省など「絹の道」線上に分布を示し、山西、河南省にまで入っている。また広東省英徳県のように、西北より入ったとするよりも南海より入ったと推定されるものもある。現在、遺跡として年代のわかるものに、広東省英徳県の南斉・建武4年(497)墓⁹⁾、河南省陝県の隋・開皇3年(584)合葬墓¹⁰⁾、陝西省咸陽・底張湾の隋・開皇19年(599)墓¹¹⁾、同・西安市玉祥門外の隋・大業4年(608)墓¹²⁾があるが、西安市近郊の第30号墓¹³⁾や山西省太原・金勝村第5号墓¹⁴⁾などは Khusrav II 銀貨の外、Arab-Sasanian 銀貨や開元通宝をまじえており、唐代に入るとは確実である。

中国におけるこの問題については、中国科学院・考古研究所長・夏鼐氏の詳細な報告¹⁵⁾があり、参考とすべきものが多く、黄文弼氏の諸報告¹⁶⁾もよるべきものが多い。筆者はかつて、A. Stein の中央アジア調査報告の整理中、Turfan 地区 Astāna 古墓¹⁷⁾中よりビザンツ金貨、Sāsān 銀貨が発見されていることを注意し、その意義を論じたことがある。

吐魯番 Turfan には、六朝末より初唐にかけて漢民族の建国した高昌国があった。唐・貞観14年(640年)、太宗の送った侯君集の軍隊によって平定せられたが、この国が東西交渉史上にはたした役割は大きい。その都城、高昌城¹⁸⁾は現在 Khara-Khoja 又は Idikut-Schari とよばれ、廢墟となって遺っており、その西北にある Astāna 古墓群は主として Kara-Khoja に住んだ高昌国およびその後の時代の支配層に属する人々

の奥津城である。高昌古城(Kara-Khoja)の城内で、1955年春、方盒中¹⁹⁾に Shāhpuhr II 銀貨4枚、Artakhshēr II 銀貨5枚、Shāhpuhr 銀貨1枚が発見されている。この組み合わせは、Tepe Maranjan, Fondukistan (共に Afghanistan) の一括資料と全く同一で、4-5世紀の間に Sāsān 朝の勢力が東方に伸張した時の波であったにちがいない。高昌古城の成立については、いまだ充分明らかでないが、前秦・建元22年(386年)、後秦・白雀元年9月8日、北涼・玄始9年11月1日(420年)の文書²⁰⁾が発見されていることは注意されるのである。

アスターナ Astāna 古墓は、筆者がかつて分類した¹⁷⁾ように、六朝中葉のもの、高昌国代のもの、唐の治下に入ってからのももの3期にわけることができる。スタイン²¹⁾調査の第1区(Ast. i)は張氏一家の墓地、第5区は汜氏一家の墓地で、第1区第4号墓(Ast. i, 4)は高昌・延和7年(608年)、貞觀20年(646年)の合葬墓、第6号墓は延寿9年(632年)墓である。第1区の第3・5・6からはビザンツの金貨(横)、サーサーン朝銀貨が、口中や眼の上から発見された。第5区第1号墓は唐・乾封2年(667)墓であり、これに近い第2号墓では口中にサーサーン朝銀貨が発見された。R. B. Whitehead²²⁾はビザンツ貨は Iustinianus I (527-565) 代金貨の模製であり、サーサーン朝銀貨は Khusrav I または Hōrmazd IV にあてている。これらの貨幣は五銖銭をともなっているが、墓の年代は7世紀初頭、中国でいえば隋より初唐にあたる。1928年の黄文弼氏²³⁾の調査によると、Kara-Khoja の古墓より Khusrav II 銀貨が出ており、1956年の雅爾湖²⁴⁾(Yar-Khoto) 古墓の調査中、同じく Khusrav II 銀貨2枚が検出されている。

『魏書』卷102西域伝によると「龜茲国」は「徵租に田なければ銀錢を税す」とみえ、『周書』異域伝に、高昌国の「賦税は則ち銀錢を計輸し、無き者は麻布を輸す」とみえる。また『隋書』卷83によると高昌国は「商胡の往来には之を税す」とある。

大谷探検隊の採集した高昌文書²⁵⁾(竜谷大学所蔵)によると

a (4917). 高昌・重光3年(622年)12月2日、「高昌国比丘果願，祈願文」(竜大文書4917)

「金銀錢二萬文」

b. 高昌・延寿9年(632)8月22日、「高昌国清信士吳君範」(竜大文書4884)

「……銀錢五萬文」

とあり、スタインが採集し、マスペロ(H. Maspéro)が訳読した高昌文書中に

c. (323)「某祈願文」

「……具。金銀錢……」

とみえている。これらの文書はいずれも、絹、衣服、武器、石灰などの財物を奉獻し、死者の埋葬に際して追善祈願する文章であり、いずれも高昌時代のものであることを小笠原宣秀博士²⁵⁾は考証している。

1960年にアスターナ古墓より発見された高昌文書²⁶⁾はいずれも延昌26年(586)の墓誌をともなった326号墓中より発見されたもので、この中には

1. 延昌廿四年道人智賈(?)夏田契

「延昌廿四年甲辰二月七日道人智賈(?)〔從〕

田阿泉辺夏南渠常田一畝交與銀

錢五文錢即畢田即付賃租百役耕田人

悉不知渠破水溢田主不知二主和同立……」

2. 麴郎出租常田契

「〔 〕辺夏中渠常田壹畝半，畝交與夏

佃銀錢拾陸文，田要逕壹年賃租佰役

〔悉〕不知，若渠破水溢，麴郎悉不知夏田佃(下欠)」

とみえ、渠田の租に銀錢が単位となっていることが知られる。次節にのべるように貞觀初年、玄奘は高昌王より「黄金一百兩，銀錢三萬」をたまわっているが、このことからしても、高昌国時代および初唐にかけて、この地域に金銀錢が盛んに通行していたことがわかる。『大唐西域記』によると、阿耆尼国(焉耆; Kara-shar)に銀山があり、「西国銀錢所從出也」としてしているが、その形制はいまのところ明らかでない。トゥルファン盆地の実際の発掘例から考えると、銀貨は Sāsān 朝銀貨、金貨はビザンツ金貨が多くをしめていたことはうたがいをいれないとおもう。

甘肅省では、いまのところ十分な調査例がない。玄奘は涼州で金・銀錢をみている。武威県の康国人康阿達墓²⁷⁾から金貨の出土がたえられているが、康国²⁸⁾は普通 Sarmakand をさすから、この地出身の Sogd 系商人であろう。

『隋書』卷24食貨志によると、北周時代のこととして

「河西諸郡，或用西域金銀之錢，而官不禁」

とあるのは、高昌国の場合と同じく、Sāsān 朝の銀貨、ビザンツの金貨と解釈されよう。

スタイン採集、大英博物館所蔵の敦煌文書(S 4528)²⁹⁾に「大代・建明2年(531年)願文仁王護国般若経」がある。

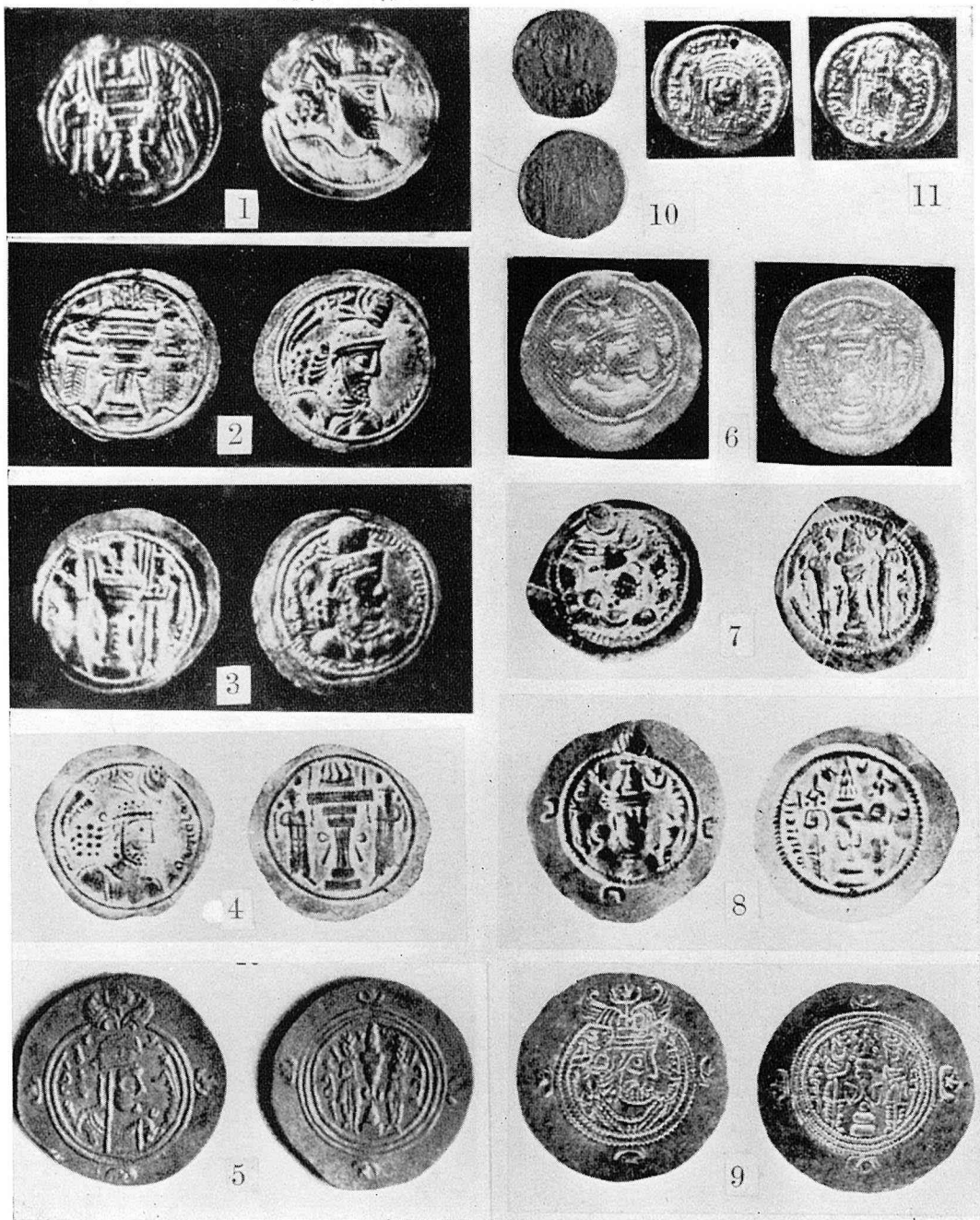
サーサーン・ペルシア銀貨とその東伝について

大代建明二年四月十五日仏弟子元榮既居末劫
生死是累離郷已久，帰慕常心，是以
身及妻子，奴婢六畜，悉用為比沙門天王
布施三宝，以銀錢千文，贖錢一千文，贖身及妻子
一千文贖奴婢，一千文贖六畜，入法之錢，即用造經
願天王成仏弟子家眷，奴婢六畜，滋益長命，
乃至菩提，悉蒙還闕，所願如是」

この中には「銀錢千文」の字がみえ、あわせて4千文が寄進されて写経の費用とされたことがわかる。北魏代には波斯国 (Sāsān-Persia) 遣使朝貢の記事は太安元年 (455年) をはじめとして、前後11回をかぞえ、6世紀に入っても、正始4年 (507年)、熙平2年 (517年)、神龜元年 (518年)、正光2年 (521年)、同3年 (522年) など、北魏末³⁰⁾ になるほど、盛んであることがうかがわれる。これは波斯のみならず西域諸国全体についてもいえることで、北魏の政治的、経済的な安定にともない、西域貿易が盛んとなり、国都洛陽のごときは『洛陽伽藍記』に「葱嶺より已西大秦に至る、百国千城徼附せざるなし。商胡販客日に塞下に奔り、所謂天地の区を尽す」とみえるほどである。青海省や西安、洛陽まで Pērōz (457-483) の貨幣がかなりの量、入っており、敦煌発見『仁王護国般若経』の東陽王願文にみる銀錢にサーサーン朝銀貨が含まれていることは否定できないようにおもわれる。

隋唐帝国の都、長安——現在の西安市の近郊には、発見例が増えつつある。咸陽・底張灣隋墓ではビザンツの Iustinus II (565-578)、西安の西郊土門村の唐墓では Heraclius (610-641年) の金貨が発見されている。両者ともに夏鼐先生³¹⁾ のくわしい考証がある。底張灣隋墓の被葬者、独孤羅は北周の功臣独孤信の長子で、かれの姉妹は北周明帝、隋文帝に嫁し、唐の高祖はかれの妹の子で、隋一代の名門³²⁾ であった。玉祥門外の隋墓の被葬者、李静訓は8才の短命を終えたが、隋煬帝の姉の孫娘にあたる。この墓から Pērōz 銀貨が発見されている。1955年発見された西安市近郊第30号墓は Khusrav II 銀貨1枚、Arab-Sasanian 銀貨1枚、開元通宝を出土しているが、これは少なくとも初唐以降であろう。

サーサーン朝最後の国王 Yazdagerd 伊嗣侯³³⁾ は641年 Nehāvand でアラビア軍に破れ、Merv 附近で殺されたが、その子 Pērōz 卑路斯は、唐高宗・咸亨年間 (670-673年) 長安に來り、本国回復の志をたてていた。唐では右武衛將軍に拜したが、唐・韋述の『兩京新記』に儀鳳2年 (633年)、右衛體泉坊に波斯寺を置くことを乞うたこ



第2図 中国発見サーサーン・ペルシア銀貨及びビザンツ金貨

1-5. Turfan (1. Shāhpuhr II, 2. Artakhshēr II, 3. Shāhpuhr III, 4. Artakhshēr II, 5. Astāna 古墓出土 Khusrav II), 6. 河南省洛陽 (Pērōz), 7. 陝西省西安 (Pērōz), 8. 河南省陝県 (Khusrav I), 9. 陝西省西安 (Khusrav II), 10-11. ビザンツ金貨 (10. Turfan, 11. 陝西省咸陽)

とをのべている。この際かなり多くの亡命のペルシア人³⁴⁾があったことが推察できる。Pērōz が長安で客死した後、その子 Narsah 泥湮師が数千の部下をとめない、再び西域にむかって兵をあげんとしたが、ことならず景龍2年(708年)再び長安に来て左威衛將軍に拜せられ、長安で歿した。現在のところ醜泉坊の波斯寺址についての調査は行われていないが、隋代より初唐にかけて、Pērōz, Narsah らの亡命の前に、すでにサーサーン朝銀貨が流入して、その道は用意されていたのである。

『隋書』食貨志によって北周の初めすでに、河西諸郡で西域の金銀銭が用いられていたことをのべたが、『唐六典』卷3, 戸部郎中, 員外郎の条に、

凡諸国蕃戎内附者亦定為九等, 四等已上為上戸, 七等已上為次戸, 八等已下為下戸, 上戸丁税銀錢十文, 次戸五文, 下戸免之附貫經二年已上者, 上戸丁輸羊二口, 次戸三口, (丁?) 共一口。

とみえる。宮崎市定博士³⁵⁾はこの銀銭を西域の銀銭と解釈されたが、至当というべきであろう。『唐六典』中の同条の夾注に

〔関内道〕原, 慶, 靈, 夏, 延, 又管諸藩落降者為羈糜州。

〔隴右道〕其秦, 涼, 鄯, 洮, 北庭, 安西, 甘, 岷又管羈糜州。

とあり、銀銭の通行地域をあげている。これらの地域はいずれも「絹の道」上の線か、北方と境を接する地帯で、以上のべた理由からサーサーン朝銀貨(およびアラブ・サーサーン銀貨)およびその模造貨の含まれていることが想定されるのである。

中国における西域金銀(銅)銭発見地名表

| I 新 疆 | | 1965年現在 | | | | | |
|-------|--------------------------|---------|----|------|--|------|----------------------|
| 番号 | 発見地名 | 遺性 | 跡質 | 当時の称 | 種類 | 発見年時 | 参考文献 |
| 1 | 烏 恰 県 | | | | 完形品878, 残碎63, その他6 計 947 S Khusrav I ʔR 2枚 Khusrav II ʔR 567枚 Arab-Sasanian ʔR (Khusrav II 形式) 281枚 | 1959 | 考古 1959-9 |
| 2 | 庫車県蘇巴什 Kucha, Subashi | 古 | 城 | 龟 兹 | S Khusrav II ʔR 2枚 A·S ʔR 1枚 | 1928 | 吐魯番考古記 黄 文 弼 |
| 3 | Kargharik | | | | Parthia Mithradāt ʔR 1枚 B Constantinus II ʔV 1枚 Constans ʔV 1枚 | | Serindia Vol III. |

サーサーン・ペルシア銀貨とその東伝について

| | | | | | | |
|----|--------------------------------------|-------|-------------|---|------|--------------------------|
| 4 | Khotan | | | Kushān, Kaniṣka AE Kushān, Wima Kadphises AE B Constans II A/ Pogonatus A/ Iustinus A/ Antimachus A/ Theodosius A/ Kushān, Kaniṣka | | Innermost Asia, Vol II |
| 5 | Khotan, Tōtkan | | | | | |
| 6 | 吐魯番, カラ・ホージャ古城 Turfan, Kara-Khoja | 方盒子内 | 高昌(城) | S Shāhpuhr II AR 4枚 Artakhshēr II AR 5枚 Shāhpuhr III AR 1枚 | 1955 | 『学報』 57-2 『考古通訊』 57-3 |
| 7 | " | 古城内 | " | S Artakhshēr II AR 2枚 | 1953 | |
| 8 | " | " | " | S AR 1枚 | | |
| 9 | " アスターナ古墓Astāna | I・3号墓 | | S Hōrmazd IV AR 1枚 Khusrav I AR 1枚 B (Iustinianus I の模製) A/ 1枚 五 銖 | 1928 | Innermost Asia, Vol II |
| 10 | " " | I・5号墓 | | B (模製) A/ 1枚 | | |
| 11 | " " | I・6号墓 | 延寿2年張(632)墓 | B (模製) A/ 1枚 | | |
| 12 | " " | V・2号墓 | (667) 范永隆墓 | 五 銖 S AR 1枚 | | |
| 13 | " " | | | S Khusrav II AR | 1928 | 吐魯番考古記 |
| 14 | " Yar-Khoto 古墓 | 6号墓 | | S Khusrav II AR 1枚 | 1956 | |
| 15 | " " | 56号墓 | | S Khusrav II AR 1枚 | 1956 | |

II 青海省

| | | | | | | |
|----|---------|------|--|--|------|------------------------|
| 16 | 西寧市城隍廟街 | 壺中発見 | | 100枚以上出土 S Pērōz AR 76枚 貨泉・開元通宝など20枚 | 1956 | 考通 1958-1 考古 1962-9 |
|----|---------|------|--|--|------|------------------------|

III 甘肅省

| | | | | | | |
|----|------------|--|----|-------|------|--------|
| 17 | 武威県康国人康阿達墓 | | 涼州 | B? A/ | 1945 | 考古学論文集 |
|----|------------|--|----|-------|------|--------|

Ⅳ 陝西省

| | | | | | | |
|----|--------------|-------------------|----|---|------|-----------|
| 18 | 西安市禮西・張家坡 | 410号墓 | 長安 | S Pērōz AR 1枚 | 1957 | 考古学論文集 |
| 19 | 〃 玉祥門外 | 隋・大業4年(608)葬李静訓墓 | 大興 | S Pērōz AR 1枚 隋五銖 5枚 | 1957 | 考古 1959-1 |
| 20 | 〃 近郊55.007の | 30号墓 | 長安 | S Khusrav II AR 1枚 A・S AR 1枚 開元通宝 | 1955 | 考古学論文集 |
| 21 | 〃 西郊土門村009工地 | 2号墓 | 長安 | B Heraclius II Constantinus A/ (610-641) 1枚 | 1956 | 考古 1961-8 |
| 22 | 咸陽市底張湾 | 隋・開皇19年(599)葬独孤羅墓 | 咸陽 | B Iustinus II A/ 1枚 (565-578) | 1953 | 学報 1959-3 |

Ⅴ 河南省

| | | | | | | |
|----|---------|--------------------|--|-------------------|------|-------------|
| 23 | 陝 県 隋 墓 | 隋・開皇3年(584)合葬劉偉夫妻墓 | | S Khusrav I AR 2枚 | 1956 | 考通 1957-4 |
| 24 | 洛陽北邙山 | 30号墓 | | S Pērōz AR 16枚 | 1955 | 文物1960-9.10 |

Ⅵ 山西省

| | | | | | | |
|----|-----------|-----|----|--|------|---------------------|
| 25 | 太原市南郊・金勝村 | 5号墓 | 太原 | S Khusrav II AR 1枚 開元通宝 13枚 | 1958 | 考古 1959-9 |
| 26 | 靈石 県 | | | Roma Tiberius (14-37) AE Aurelius (270-275) AE 計16枚 | | W.S.Bushell 桑原隲藏 |

Ⅶ 広東省

| | | | | | | |
|----|---------|----------------|--|----------------|------|-----------|
| 27 | 英徳県 6号墓 | 南斉・建武4年(497)塼墓 | | S Pērōz, AR 3枚 | 1960 | 考古 1961-3 |
|----|---------|----------------|--|----------------|------|-----------|

(S: Sasanian, B: Byzantin, A・S: Arab-Sasanian)

Ⅲ 玄奘の旅程と西域の通貨

前節にのべたことから、サーサーン朝ペルシアの銀貨は、ビザンツの金貨とならんで、国内のみならず、国外にも、ひろくひろがっていることが明らかとなった。ことに Taxila, Gandhāra, Begram より、ソ連領中央アジア、トゥルファン、(敦煌)、(涼

州)、長安と「絹の道」にひろがり、6世紀より7世紀にかけて国際通貨としての機能をはたしていたことになるのである。われわれはここで、7世紀の初頭、唐都、長安を出発して、天竺に求法の旅を行なった玄奘の旅程をかえりみることにしよう。彼の旅行については、玄奘の著述である『大唐西域記』³⁶⁾ 12巻がある。これは西域・天竺に関する詳しい見聞の記録であるが、これをかく方式は、隋の達磨笈多の編した『大隋西国伝』によったのではないかと私は思う。『統高僧伝』³⁷⁾ 巻2によると達磨笈多は南賢豆の羅囉国の人とつたえ、隋の東都(洛陽)雒濱上林園翻訳館にあってこの書物を著した。これは凡そ十篇より成り(1)方物、(2)時候、(3)居処、(4)国政、(5)学教、(6)礼儀、(7)飲食、(8)服章、(9)宝貨、(10)山河、国邑人物——を収めていたという。この書物はいまにつたわらないが、玄奘の記述もこの順によるものが多いことは、気づかれるところである。この(9)に宝貨の項があるが、玄奘も各地の通貨についてはかなり詳細にしている。玄奘がこの書物を西域旅程のガイド・ブックとした可能性は多いのである。

玄奘の歿後、則天武後の垂拱年間、かれに師事した産棕が『大慈恩寺三藏法師伝』10巻³⁸⁾ あらわした。これは、玄奘自身の体験事蹟もふくまれているので参考になる。

玄奘の旅程(大唐西域記)にあらわれた西域の通貨

| | | 比定される地名 | 現 在 地 名 | 金貨 | 銀貨 | 銅貨 | 『西域記』中の記述 |
|----|-------|------------|--------------------|----|----|----|-------------|
| 1 | 阿 耆 尼 | Akni | 焉耆 Karashar | ● | ● | ● | |
| 2 | 屈 支 | Kucha | Kucha | ● | ● | ● | |
| 3 | 跋 祿 迦 | Bāluka | Aksu | | | | |
| 4 | 素葉水城 | Suj-ab | Chu 河畔の Tok-mak | | | | 諸国高胡雜居 |
| 5 | 咀邏私城 | Taras | Taras | | | | 役属突厥 |
| 6 | 赫 時 | Tashkent | Tashkent | | | | 諸国高胡雜居 |
| 7 | 颯 祿 建 | Samarkand | Samarkand | | | | 異方宝貨多聚此国 |
| 8 | 都 貨 邏 | Tokhara | | ● | ● | | 模様異於諸国、其主突厥 |
| 9 | 縛 喝 | Balkh | Balkh | | | | |
| 10 | 梵 衍 那 | Bāmiyān | Bāmiyān | | | | |
| 11 | 迦 畢 試 | Kapiça | Begram | ● | ● | ● | 規矩模様、異於諸国 |
| 12 | 天 竺 | | India | ● | ● | | |
| 13 | 濫 波 | Lampa | Lamghān | | | | |
| 14 | 那揭羅曷 | Nagarahāra | Jelalābād 近郊 | | | | 以金錢買花 |
| 15 | 健 馱 羅 | Gandhāra | Peshawar 近郊 | | | | |
| 16 | 波 刺 斯 | Persia | Persia | | ● | | 貨用大銀錢 |

玄奘が長安を出発したのは貞観 27 年 (627 年)、かれの 26 才の時であろうと考えられている³⁹⁾。秦州までは、孝達という僧と同行、蘭州から涼州までは官馬に便乗した。涼州については「河西都会の襟帯をなし、西蕃、商左、諸国の商侶往来し、停絶あるなし」といい「散会の日、珍施豊厚、金銭・銀銭、口馬、無数なり」としてしている。この金銭・銀銭は『隋書』食貨志にいう例の西域の金・銀銭であったことはうたがいない。

涼州から瓜州、伊吾をへて高昌国に到達する。時の高昌王は魏文泰 (619—640 年在位) であった。国王はかれを手厚くむかえ、王宮の側の寺院にとめた。玄奘の学徳にうたれた王は、高昌に留るよう懇請したが、それが無理であることがわかると、天竺の帰路、3ヶ年高昌に留って供養を行うことを乞い、さしあたり、いまは仁王般若経の講義をさすげられるよう頼みこんだのである。この講義がおわると、玄奘のために法服三十具と、西域の旅は寒いので、面衣、手衣、靴などをつくり

「黄金一百両、銀銭三万、綾及絹等五百匹」

をおくって、往復 20 年の所用の資にあてたのである、また馬 30 匹、牛力二十五人をたまい、殿中侍御史徹信をやり、西突厥の葉護可汗の衙までおくらせ、屈支 (Kucha) など 24 国に紹介状 (封書) をかき、便宜をあたえられんことをもとめた。この封書には大綾一匹をつけ、葉護可汗には綾絹五百匹、果味兩車をおくったのである。

高昌王は、その母后が隋の華容公主 (煬帝の一族宇文氏の娘) であったが、高昌王の王子の妃は葉護可汗の妹であった。西突厥の王庭は素葉城 (現在の Tokmak 近郊) にあった。可汗は中国語を解する青年をつけて、玄奘を迦畢試国 (Begram) におくらしめた。

高昌国王より与えられた「銀銭三万」というのは、前節の高昌文書にみえる「銀銭」にあたり、Kara-Khoja, Astāna, Yar-Khoto など Turfan における諸遺跡の発見例から考えて、サーサーン銀貨がふくまれていたことは疑いを容れぬ。このように考えると、西域より高昌に流入した銀銭をもって、玄奘は逆に西域に旅立ったことになるのである。

玄奘はいまの Afghanistan の濫波国 (Lamghān)、那揭羅曷 (Nagarahāra) 以東を天竺の中に入れていいる。天竺の貨幣については

「然其貨用、交遷有無、金銭、銀銭、貝珠、小珠」

としてしている。しかし Begram, Kābul, Haḍḍa, Gandhāra (Peshawar), Taxila にかけてサーサーン・ペルシアの貨幣が濃厚に分布しており、従来の Indo-Scythian, Indo-Parthian, Kushān, Kidāra-Kushān, Ephtal などの貨幣と共存して

サーサーン・ペルシア銀貨とその東伝について

いる。

那揭羅曷国 (Nagarahāra) では

「法師皆得礼拜尽其哀敬。因施金銭五十，銀銭一千，綺旛四口，錦兩端，法服二具，散衆二具，散衆雜華，辞拜而出」

とみえる。かれは醯羅城 Haḍḍa のこともくわしく著述しているので、ここにも奉獻したかも知れぬ。

健駄羅国 (Gandhāra) では、Peshawar の東郊にある Shah-ji-ki-dheri 寺院をたずねている。ここには Kanīṣka 王の建てた大ストゥーパがあった。玄奘は Gandhāra の寺院でも、供養を行なった。

「此等聖迹，無量，法師皆得敬礼，自高昌王施金銀綾絹衣服等。所至大塔大伽藍皆分留供養而去。」

Nagarahāra や Gandhāra では、高昌王からたまわった「金銀綾絹衣服」を奉獻しているが、銀銭がふくまれているのは、いうまでもなく、ここで通用力があったとみるべきであろう。われわれは高昌王たまわるサーサーン朝の銀貨を使用したとみることができるのである。

天竺における研学で、十数年の春秋はいつしかすぎた。貞観 17 年 (639)，かれが中国にかえる日が来た。その頃インドの北部をほぼ統一していた戒日王 (Harshavardhana) は、南方、海路をとることをすすめて、使を出して唐まで送りとどけようといっていたが、玄奘は高昌王の約束があるので、北方陸路をとることをのべ、金銭その他の品々を辞退した。玄奘のあつめた経典や仏像は北インドの王、烏地多にはこんでもらうことになっていたので、戒日王は烏地多王に大象一匹、金銭三千、銀銭一万枚をことづけ、玄奘の旅用にあてさせた。

ここでも金銭、銀銭があらわれる。Gupta 朝では金貨・銀貨を発行しているから、これは Gupta 朝のものであってもさしつかえない。しかし Taxila, Gandhāra, Begram よりソ連領トルキスタンはサーサーン・ペルシア貨幣の通行圏であり、兌換を余儀なくされたことはあったかも知れぬ。

帰路は再び Taxila, Gandhāra, Udyāna (Swat) より Lampa 国にでたが、ここから Hindu Kush をこえ、Kunduz (活国) に出た。ここで、彼は高昌王麴泰が死に、高昌国もほろびたことを知った。かれは Wahan 峡谷より Pāmīr をこえ、Taklamakan 沙漠の南を通って沙州 (敦煌) 経由、長安に出た。貞観 19 年 (645 年) 1 月 6 日、玄奘はついに長安の漕渠にたどりついたのである。

玄奘の不撓不屈の信念は、その大旅行を完成したばかりでなく、訳経講述における彼の業績にもあらわれている。後世の人々は、彼の大旅行の伴侶として孫悟空、猪八戒を考え出したが、彼も人間である以上、通る国々の社会経済上の制扼に従わざるを得なかった。彼が峻険をこえ、白沙をわたり、諸国を歴遊することのできたのは、高昌国王より与えられた西域の銀錢と中国の絹によるところが多かったことは、改めて銘記しておく必要があるとおもわれる。またこの銀錢はサーサーン・ペルシアの銀錢を含み、Taxilaまでは少なくともその通行圏だったのである。

IV あとがき

現在、かつての「シルク・ロード」を一貫して通行することは閉ざされている。しかし、パキスタン、インド、アフガニスタン、イラン、ソ連領中央アジアおよび中国の各地において、精細な考古学的調査がつつけられており、本稿であげる類の資料も、今後もさらに発見される可能性が多い。本稿は、それまでの一つのメモにすぎないことをおことわりしておきたい。

戦後まもないころ、京都大学の大学院学生として、宮崎市定先生の講義に列し、そのレポートとして、中国で発見された西域古代貨幣の分布図をつくった記憶がある。それからもうおよそ20年、あいかわらず遅々たる歩みをかこちながら、まとめたこの小篇であるが、このたび先生の御退官記念特集号に加えさせていただくことは、筆者望外の光栄である。

(1965年2月稿)

(筆者は九州大学文学部助教授)

註

- 1) サーサーン・ペルシアの歴史については Arthur Christensen: *L'Iran sous les Sassanides*, Copenhagen 1944²/Roman Ghirshman: *Iran*, 1954/ditto: *IRAN. Parthians and Sassanians* (Thames and Hudson) 1962 がある。本稿の世系、年代はギルシュマン教授によるが多かった。
- 2) サーサーン朝貨幣については次の著書がある: F. D. J. Paruck: *Sāsānian Coins*, Bombay 1924/J. de Morgan: *Manuel de Numismatique orientale*, Paris 1923—*Les Parthes arsacides de Perse* (p. 125-171); *La Perse* (p. 207-331); *Les Indes* (p. 332-384)/J. Allen & C. Trever: *The coinage of the Sāsānians* (A. U. Pope: *Survey of Persian Art*, Vol. I, London 1938)/J. W. Walker: *A Catalogue of the Arab-Sasanian Coins*, London 1941/Л. Я. Борисов и В. Г. Луконин: *Сасанидские Теммы*,

Ленинград 1963.

- 3) R. J. Forbes: *Metallurgy in Antiquity*, Leiden 1950, p. 188-189. ヨーロッパでは現在のソ連本土よりスカンジナビヤ半島までアラビア貨幣が流入している。この中に、イランより、ソ連領トルキスタンで製作したものがある。熊野聡:「ヴィーキング活動の商業史的考察」(『史潮』84-85号)。
- 4) *The Travels of Marco Polo (A New Translation by R. E. Catham)*, 1958, p. 45
および岩村忍:『マルコ・ポーロの研究』上巻, p. 164。
- 5) 白鳥庫吉:「塞民族考」(『西域史研究』下, 所収), p. 611。
- 6) 白鳥庫吉:前掲論文 p. 608。
- 7) J. Allen: *Inventory List of coins found or obtained (Sir A. Stein: Serindia, Vol. III, Appendix B)*。
- 8) 榎一雄:「所謂シノ・カロシュティ銀について」(『東洋学報』42-3) / 夏鼎:「和闐馬錢考」(『文物』1962-7・8)。榎教授はこの種の貨幣を B. C. 1世紀末より2世紀の初めに Khotan で鑄造されたものとした。夏鼎氏は A. D. 73年に班超が Khotan にいたった以後のものと考えている。
- 9) 広東省文物管理委員会・華南師範学院歴史系:「広東・英徳, 連陽, 南斉和隋唐古墓の発掘」(『考古』1961-3)。
- 10) 黄河水庫考古工作隊:「一九五六年秋河南陝県発掘簡報」(『考古通訊』1957-4)。
- 11) 夏鼎:「咸陽底張湾隋墓出土の東羅馬金幣」(『考古学論文集』所収)。
- 12) 唐金格:「西安西郊隋李静訓墓發掘簡報」(『考古』1959-9)。
- 13) 註 15-1 (後掲) の論文 p. 123。
- 14) 山西省文物管理委員会:「太原南郊金勝村唐墓」(『考古』1959-9)。
- 15) 一1 夏鼎:「中国最近發現的波斯薩珊朝銀幣」
- 15) 一2 夏鼎:「青海西寧出土的波斯薩珊朝銀幣」(共に夏鼎:『考古学論集』1961年に所収)。
- 16) 黄文弼氏は 1930 年における交河城高昌墓の調査を整理して『高昌』第一分本(1931年), 『高昌專集』(1931年), 『高昌陶集』(1933年)を發表した。また, 1928, 30年の調査をまとめて考古研究所より『吐魯番考古記』(1954年)として公刊している。
- 17) 岡崎敬:「アスタナ古墳墓の研究」(『仏教芸術』19所収), 1953年。
- 18) 高昌故城(Kara-Khoja)は D. Klemenzenz, A. Grünwedel, A. von Le Coq, A. Steinらによって調査され, Grünwedel, Stein は都城のプランを發表している。A. Grünwedel: *Bericht über archäologische Arbeiten in Idikut-schari und Umgebung im Winter 1902-03*, München 1905/Sir A. Stein: *Innermost Asia*, Vol. II, Plate, Oxford 1928。近年, 閻文儒教授の高昌故城の論文は参考となる。閻文儒:「吐魯番的高昌故城」(『文物』1962-7・8)。

- 19) 李遇春：「新疆吐魯番發現古代銀幣」(『考古通訊』1957-3)。夏鼐氏は註15-1の論文で、この出土地点を宗教建築と考えている。Taxila や Tepe-Maranzan の例より考えてその可能性は多い。
- 20) 黄文弼：『吐魯番考古記』, p. 33。
- 21) Sir A. Stein : Innermost Asia, Chap. XIX : *The Ancient cemeteries of Aslāna*, p. 642/ F. M. G. Lorimer and J. Allan : Inventory List of coins found or obtained (Sir A. Stein : *Serinda*, Vol. II, Appendix B)。
- 22) A. Stein : *ibid.*, p. 646。
- 23) 黄文弼：『吐魯番考古記』, p. 49。
- 24) 夏鼐：註15-1の論文, p. 127。
- 25) 小笠原宣秀：「吐魯番出土の宗教生活文書」(『西域文化研究』第三, 敦煌吐魯番社会経済資料下), 1960。
- 26) 呉震：「介紹八件高昌契約」(『文物』1962-7・8)。
- 27) 夏鼐：註11)の論文, p. 139。
- 28) 桑原隲藏：「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」(『東洋文明史論叢』所収), p. 357。
- 29) 藤枝晃：「北朝写經」(『墨美』119) 1962, 挿図4。これは北魏東陽王元大榮の願經である。建明2年「銀錢4千文を寄進して大量写經をしたらしい。南朝では偽經とされた本經が、北朝では護国の聖典として斯く特別に尊崇せられることを注意する」との笠沙雅章氏の説を紹介している。
- 30) 伊瀬仙太郎：「西域経営史の研究」, p. 126 には、『魏書』によって西域諸国の北魏に対する朝貢表をあげている。
- 31) 註28) および夏鼐：「西安土門村唐墓出土的拜占廷式金幣」(『考古』1961-8)。
- 32) 岡崎敬：「隋趙国公独孤羅の墓誌銘の考証」—陝西省咸陽・底張湾の北周・隋唐墓—(『史淵』83)。
- 33) 榎一雄：「ササン朝末期の王統に関する兩唐書波斯伝の記載に就いて」(『北アジア学報』1)。
- 34) 桑原隲藏：註28)の論文, p. 304。また東京国立博物館所蔵にかかるものに「波斯国樊長阿羅憾丘銘」があり、ペルシアより亡命したかれは景雲元年(710)洛陽に歿した。羽田亨：「波斯国樊長阿羅憾丘銘」(『東洋学報』大正2年11月号)。
- 35) 宮崎市定：『五代宋初の通貨問題』(1943年), p. 100。
- 36) 『大唐西域記』は「京都帝国大学文科大学叢書第一」本(1911年)による。
- 37) 唐・道宣：『統高僧伝』(『大正新修大藏經』第50卷, 史伝部2所収)。達磨笈多(Dharmagupta)は隋の開皇10年, インドより西域經由, 大興城に至った。翻訳する經論7部32卷である。
- 38) 王輯唐校訂本(1923年)および東方文化学院京都研究所校訂本(1932年)による。

サーサーン・ペルシア銀貨とその東伝について

39) 王輯唐本による。前嶋信次：『玄奘三蔵』（岩波新書，1952年）もこれに従っている。